

冬のシベリア鉄道に行く

昨年末シベリア鉄道が、漸く全線にわたって電化された。大ロシアにとっては、実に1916年全線開通以来の悲願達成である。春なお遠い3月に早速全線9,288 kmを走破してみようと、敢えて豪雪期を選んで出かけてみた。途中バイカル湖を見学がてらイルクーツクに1泊したが、始発ウラジオストック駅から終着駅・首都モスクワまで、「ロシア号」から「バイカル号」を乗り継ぐ、車中6泊の世界一長〜い鉄道の旅だった。15両編成一室4名のコンパートメント車両が、われわれ仲間5名の6昼夜の居住空間だった。コンパートメントの2段ベッドには手すりがなく、うっかりすると上段のベッドから転落しかねない。ベルトで身体を縛り付けるか、壁際に張り付いて眠るしかない。各車両には専属の2人の女車掌がいて、トイレや廊下の掃除から、湯沸し、暖房作業まで黙々と立ち働いていた。車内の気温は大体30℃前後に保たれ、下着1枚か、精々シャツ1枚を重ね着する程度で充分で、プラットフォームに降りる時は、その上にダウンジャケットを引っ掛けていた。各車両の暖房だけは電気系統を使用しない。暖房はデッキにあるかまどを使った石炭だった。停電したら、乗客が1人残らず一晩のうちに凍死してしまうという嘘のような話を聞いた。

最大の難問は、「ことば」だった。ロシア語以外はまったくあてにできず、車掌を始め、ロシア人乗客老若男女、食堂車のスタッフ、駅員、キオスクの売り子、行商のおばさんたちとの意思の疎通は、ジェスチャー以外まるで役立たなかった。国際列車と銘打ちながら駅名や、車内の表示もすべてキリル文字で書かれ、これほど外国人旅行者に気を遣わない鉄道も珍しい。だが、言葉の通じない中で、何とか身振り手振りで意思を伝えようとする私たちにとって、救いはたっぷりある時間と、一旦胸襟を開けば親切的なロシア人氣質だった。いつもガラ空きの食堂車に入りぴたり、温かいもてなしの中でロシア名物‘ボルシチ’と田舎料理に舌鼓を打ちながら、カシオの日露電子翻訳器を使って、もどかしい日露国際交流を楽しんだ。

食堂車とコンパートメントをホームグラウンドに、私たちは、時には親しくなった隣室の若いロシア人兵士を仲間に引き入れ、朝から晩まで、たどたどしいロシア語とジェスチャーで宴会気分を満喫していた。時折停車するローカル駅では、オームリの煉製、サラミソーセージ、ピロシキ、ペリメニ等、ロシアの田舎料理をたんと買い込み、持ち込んだウオッカを煽ってはおだを上げていた。

線路際には、1kmごとに2本のキロポストが建てられ、モスクワからの距離を表示していたが、同じキロポストのモスクワ側よりシベリア側の距離表示が1km分多いことが気になった。尋ねてみると、吹雪で迷った場合小さい数字の方角がモスクワ方面を指しているとのことであり、ここにも鉄道建設、保守管理にかかわる安全のための知恵が発揮されている。

時間的にはスケジュールに遅れることもなく、停車駅では、何度か直流と交流式の変更による電動車の交代もあって、その間駅前喫茶店を覗いたり、ウィンドーショッピングを楽しんだが、一度だけ度肝を抜かれたことがあった。油田の町・チュメニに停車した時のことである。一部

の乗客がプラットフォームから駅舎へ冷やかに走っている間に、長い空の連結列車がその狭間に停車してしまったのである。いくら列車の車掌を呼んでも応答がなく時間も迫り、遂に意を決した駅舎側の乗客が、突如車両の下へ潜り込み、通り抜けようと試みたのである。幸い列車は動かなかったが、もし動いたらと思うと、ぞっとする。それにしても何の予告も警告もなく列車が乗客の集団を寸断してしまう荒っぽさなのである。いま思い出してもギョッとさせられる事件だった。

窓外には、雪原と白樺林が厭きることなく続き、母なるヴォルガ川を渡り、ヨーロッパとアジアの分水嶺であるウラル山脈を越え、地球を4分の1周したにも拘わらず、外の景色にほとんど変化が見られない。ところどころ見える村落にもあまり生活臭が感じられない。雪の中に通行人の姿を目にすることもなく、僅かに民家の煙突からたなびく煙が、微かに生活の営みをアピールしている。時折停車する大都市の駅は、逞しく生きる人間が人恋しさにやって来る交流の場でもある。だが、駅頭で20ルーブル(約80円)程度のビールに、10ルーブルの手料理を売りにやってくる年金生活者のおばさんたちには、したたかさが感じられた。一方、ロシアの天文学的な国土の広大さにはただ唖然とし、人間の矮小さと無力感を感じるばかりだった。反面ありあまる時間に倦怠感を感じながらも、全体を通して包容力のあるロシア的な素朴な交流と、ロシアの食を楽しみながら心豊かに過ごしたシベリア鉄道の旅こそが、慌しい現代世相の中で「本物の旅」だと実感もさせてくれたのである。極寒のモスクワ駅に降り立ったとき感じたのは、これまでの旅で感じた満足感や充実感とは、確かに一味も二味も違うものだった。